



講師：高田典夫 氏
実践女子大学 生活科学部
生活環境学科
建築デザイン研究室 教授

都市のインテリア ～集まって住むということ～

本学の日野キャンパスを舞台に、生活をより心地よく安全にするための研究・教育活動を行なっている生活科学部。そこで得られた知見を地域のみなさまにお役立ていただくため、4つの学科がそれぞれのテーマで公開講座を開催しています。本年度第4回は生活環境学科が担当し「所変われば品変わる」と題して、フランス南部及びイタリア山岳都市での生活体験を通して見えてきたことをレクチャーします。

都市は大きな家である

都市居住者にとって、都市は大きな家である。

個人の住まいをベースとして、その周りに居心地のいい場所を求めて彷徨することもまた楽しい。結果として、歩いて楽しい街こそが居心地がいい我が家のように感じる。

生活の場としての都市空間

「塔の家」(設計:東孝光、1966)から始まったと言ってもいい我が国の「都市住宅」の系譜において、住宅を取り巻く都市空間のあり方、使いこなし方が家のあり方のバランサーとして課題になってきたと言える。

筆者は、今年の4月から9月にかけて、生活空間としての外部空間となりうる「公共空間」に着目して、その使われ方、特徴、構成要素などを明らかにすることを目的として、それらの観察・調査のためにヨーロッパのいくつかの都市に滞在した。本講座では、その中のイタリアを中心に得た知見をレクチャーします。

人の居場所になるために・・・

各都市での観察・調査の結果抽出された生活の場としての都市空間を構成する要素の特徴的な様相としては、以下のものがあげられる。

1) 斜面/スロープ

実際の広場空間を体験して意外に感じたのは、勾配のきつさである。シエナのカンポ広場にしてもサン・ジミニャーノのチステルナ広場にしても、結構急勾配であった。その場の人の佇まいを観察していると、その勾配のきつさが人の行動を誘発しているのではないかと感じられた。どの広場でも、直にすわったり、寝転んだり・・・という状態が当たり前のように見られる。座り込むのにちょうどいい勾配とも言えるかもしれない。勾配による方向性が、広場の中心を示しているとともに、その場を共有している人々に緩やかな一体感が生まれているように感ずる。

2) 段差/階段

スロープと段差の形態的な違いは大きいとも言えるが、その形態の特徴が誘発する人の行為はそれほど大きな違いはない。映画「ローマの休日」の中でのスペイン階段は、A. ヘップバーンがアイスクリームを食べるために腰掛けるということで魅力的な場となっている。現在のスペイン広場は、それどころではないほど込み合っていて、人の行為を誘発するだけの空間的余裕がないのが残念である。

階段はシークエンシャルな段差の連なりとも言えるが、その位置する場所によっては観客席にもひな壇にもなりうる。見る側が、見られる側に変わる・・・という行為の転換が起きることにより、場と時間の共有意識が生まれ、緩やかな(一時的な)コミュニティが生まれる。

街なかにあるちょっとした段差も、そこを通る人々の行為を誘発してしまうことが多々ある。車道と歩道の境界を構成する縁石もその一つである。決して座りごちがいい訳でもないし、その高さも座るには低すぎると思うが、こういう風景はよく見かける。

3) ベンチ

街路に面した建物の外壁の足元にある腰掛けにちょうど良さそうな出っ張りや、本来何のために作られたものなのだろうか。現状では、観光客のお休み所となってしまっているが・・・

一方、歩道と車道を分ける位置に置かれているベンチ状の台。明らかにベンチに見えるが、ベンチとして使われている状態は、どうも稀のようである。ポラードとして使われているベンチ状の台は、使い方によっては、有用な都市街路の装置になりうると思われるが、まだそこには至っていない。

4) 水飲み場

壮大な水道橋まで作って都市に引き込んだ水は、公共の水場で人々に提供される。街角、広場、建物の外壁・・・水のあるところに人が集まり、会話が生まれる。都市には数多くの水場が現存しているが、その大半が現役である。そのインフラが未だに使われていることにびっくりである。



カンポ広場、シエナ



サンドロ・ベルティエーニの記念碑、ミラノ



ナヴォーナ広場、ローマ



街角の水飲み場、ルッカ



アルノ川、フィレンツェ



木陰で・・・、ルッカ

5) 水辺・河岸・噴水

今回、ピサとフィレンツェで同じ川の流れを体験することになったが、その川に対する表情はそれぞれ異なっていた。フィレンツェでは、河岸を開放し、積極的に使っていこうとしたり、川にカヤックを出して流れを楽しんでいたりしていたが、ピサでは、人工的な護岸に守られていて、水辺に近寄ることもできない場所が多く、その町での川の扱いの違いにちょっと考え込んでしまった。

街なかで人の手で作られた水による場である噴水は、水の形態と立地によって噴水を取り巻く環境は大きく異なる。

6) 木陰・並木

ヨーロッパの都市、特に旧市街地では、街角や建物のエントランス脇、ちょっとした歩道の広がり部分など、結構「緑」に遭遇する。今回の旅は、春から夏にかけてであったので、人々はその木陰を求めて、街なかを歩いて、木陰でたむろして話をしている風景などをよく見かけた。

7) カフェ・露店

人の集まるところにカフェや露店があるのか、カフェや露店があるから人が集まるのか・・・何れにしても、街のにぎわいを作り出していることには違いない。生き生きとした生活感溢れる空間に迷い込むと、その街のエネルギーを感じることができる。歩いていて楽しいのは、市場や屋台など、生活に密着した空間で、そこに入り込むとその町での生活を垣間見ることができる。

8) 車・駐車場

どの町も自動車の処理について考え込んでいる。基本的には旧市街地には許可された車だけが入り込むことができる。それでも車がないと生活

が成り立たないようであるので、どの街路も路上駐車場と化している。祭りの時には人々が集まる教会前の広場も、日常的には広大な駐車場となっているところを多く見かけた。そんな中でちょっと気になった車を見かけた。それが移動図書館。ドゥオーモ広場の一角という思いがけないところで見かけたカラフルなバス、よく見ると図書館である。見ていると結構利用者は多く、ちょっと意外でビックリである。

都市は大きな家である

都市のインテリアとして機能していると思われるエレメントに着目し、その様態を観察することによって人と場との関係とその可能性、場が人にもたらす影響などについてコメントを加えた。

今回の観察・調査においては、南ヨーロッパの街での生活は、自宅/近隣/外部という空間をほとんど区別せずに自由に往来し、使い倒している様子が、散見され、「都市のインテリア」という概念が、無意識のうちに一般化していることがわかった。このことは、我が国の都市居住者にそのまま当てはめることができるわけではないが、方向性としては検討に値するものと考えられる。

今後はさらに多くの観察・調査を重ね、知見を深めるとともに、我が国における都市居住の一つの形としての「都市のインテリア」という考え方を根付かせていきたいと考えている。

註) この論考で扱っている「都市のインテリア」は、著者による造語で、都市空間を自分の家のように使いこなしている状態が、自分らしくカスタマイズされた家とインテリアの関係と通じることがあると感じたところから浮かんできた言葉である。

来場者アンケートから (抜粋)

- 都市空間、広場、水飲み場、いろいろの都市の顔を見させていただきました。飲み水はある意味で衛生上問題はないのかと、少し心配になりました。(日野市在住、男性)
- フランス・スペイン・イタリアと学生時代に行った風景を思い出しながらお話を聞くことができました。(日野市在住、女性)
- 講師の方々が外国で感じ取られたことについて、わかりやすく説明していただき、興味深く聞きました。(日野市在住、女性)
- せっかくの面白い講座なのに参加者が少なくて勿体無いと思いました。(日野市在住、女性)
- ヨーロッパの都市と日本の都市の差。スロープ、段差、広場、何が個性や美を作っているか、初めて理解できました。(日野市在住、女性)
- 昔イタリアに行きました。フィレンツェ・ローマ・アッシジなど思い出深くお話を聞かせていただきました。(日野市在住、女性、70代)



魚市場、カタニーヤ



移動図書館、カタニーヤ



マテラ